

引用を使って多面的に考える

—一字荘テーマ活動の実践—

細川 太輔

1. 課題意識

「理解を深め、物語れる」とは、対象について自分の考えをもち、それが本当に言えるのかどうか、多面的に吟味をすることであるととらえる。本学習のキーワードは「引用」である。授業者は大学生のときに、論文をどのように書いたら良いのか、特に論文の引用について悩んだ経験がある。引用するのが論文の作法というのは、論文を読めば分かる。しかし、何のために論文を引用するのか、引用してどうするのかがわからず、結局わからないまま卒業論文を書いた。引用したものをそのまま事実として使うのは間違っているとは分かっている、それしか引用する方法が分からなかったという苦い思い出がある。

「引用」することはオリジナルの意見を作りには必要になってくる。自分とは違う意見、似た意見など他者の意見としてはっきりと分離しないとオリジナルの意見をもつことはできないと考える。しかしその「引用」の方法を教師が押し付けても引用のよさや目的を実感することはできない。そこで子どもが主体的に「引用」を学習できるように単元を構成した。

学習指導要領解説では中学年の読むことの指導事項エに「目的や必要に応じて、文章の要点や細かいところに注意しながら読み、文章などを引用したり、要約したりすること」とある。中学年で引用の方法を知り、引用することが中学年でおさえられている。高学年ではその指導事項が二つの方向で発展している。一つは書くことに発展するということである。中学年では読むことのみ引用であったが、高学年では書くことに発展し、自分の意見や主張に説得力をもたせることにつなげていく。もう一つは中学年の読むことでは目的や必要に応じて読むことまでであるが、高学年では課題解決のために複数の本を読んで多面的に情報を収集し、共通点や相違点をふまえて考えをまとめることが求められている。引用を用いて多面的な角度から課題にせまり、考えを深めていくことをねらっている。

またここで考えなくてはいけないのはインターネットの引用をどうするかである。一般的にインターネットは信頼性が低く、図書は高いと言われているが、その通りだろうか。最近はCINIIなどで論文もインターネット上で見ることができるし、官公庁のデータもHPで掲載されている。逆に図書でも信頼性の低いものもある。情報化社会と言われている現在、インターネットを信頼性が低いという理由で排除するのは合理的でないと考える。インターネット、図書両方の長所・短所というメディア論的な議論ではなく、情報源がどうであるか、記述方法はどうか、という観点で見なくてはならないと考える。

本稿では引用を用いることで、児童が自分の考えをもち、それが本当に言えるのかどうか、多面的な思考をもてるかどうかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点・実感のある学びを生み出す学習環境

(1) 単元を貫く言語活動

単元を貫く言語活動として、「一字荘テーマ活動をしよう」を位置付けた。言語活動例は書くこと（イ）「自分の課題について調べ、意見を記述した文章や活動を報告した文章などを書いたり編集したりする言語活動」と読むこと（イ）「自分の課題を解決するために、意見を述べた文章などを利用する言語活動」を複合させた言語活動である。子どもたちは4年生のときから、一字荘に行き、テーマ活動を行ってきた。テーマ発表会には同じ学年

の友達だけではなく、保護者や下級生が見に来てくれる。子どもたちにとって主体的に取り組める活動である。

5年生のときには、資料を読んで仮説を立てることを行い、その検証を一字荘で行った。6年生では、資料を読んで仮説を立てるだけではなく、検証した結果から自分の考えを作る考察に資料を用いる。自分の意見を補強したり、一般化したり、または反対意見として視野を広げるために使ったり、新たな疑問や仮説を見つけたりして、自分の考えを深めることをねらっている。

(2) 0次の学習

この学習では夏休みの自由研究と名人カードの記入を0次に設定した。0次とは、教師がいきなり始めるのではなく、子どもたちから学習したい、と思えるようにさせるよう、学習に入る前に、意欲を醸成することである。自由研究、名人カードを交流した後、内容が深まった名人カードを使ってさらに研究をしたいと子どもは思うであろう。その意欲を0次とし、学習を始めることにする。

また名人カードは意欲を醸成するだけではなく、子どもたちが自分たちで見つけるべきことを探すということもねらっている。教師が引用を押し付けるのではなく、子どもが自分たちで探し出すことで主体的な学習となる。このことにより、子どもが学びたいという学習になると考えた。

(3) 実の場における活用

この学習では、実際に読んだり、書いたりしたものを一字荘発表会という実際の場所で使うことを考えている。実際に学習したものを活かし、それを保護者や下級生に見てもらうことで、子どもたちは自分が読んだ際や書いた際に工夫したことの効果を実感できるはずである。また引用を用いて自分の考えを深められたということを実感することで、引用することの良さを実感し、また引用して考えを深めたいと思うようになるはずである。そのような面で、一字荘発表会は実感のある学びを生み出す学習環境として位置付けられる。

(4) グループでの活動

知識を個人の中の閉じられた活動と捉えるのではなく、共同体で作り上げるものとして捉える立場をとる。また自分と他者で観点が異なり、それを交流することで幅広い視野をもつことにもつながる。この学習では常にグループで活動し、助言し合う学習環境を取ることにした。具体的には研究の進捗について、常にアドバイスをもらったり、振り返りのあとのコメントを友達に書いてもらったりするなど常に共同研究者として友達を位置付けることにした。そのため二つの学習環境デザインを行った。

一つは研究バディを作ったことである。研究は一人で行うものでもあるが、チームで行うものでもある。バディに常に相談することで、研究上の悩みについて一緒に考えたり、バディの研究内容や方法を自分に取り入れたりすることができる。自分の研究について分かってくれるバディには振り返りカードに毎回研究に対するアドバイスを書いてもらうことにした。

もう一つは常に友達と相談し合える雰囲気を作ることである。静粛に研究を進めるのではなく、困ったことがあれば気軽に話し合えるような雰囲気づくり、机の配置を考えた。図書室の丸テーブルを用いるなどなどリラックスして考えることができるような配置を考えた。また持ち運びができるコンピュータを用いたり、電子黒板を用いたりすることで、グループで情報検索が行えるようにした。

(5) 引用カード

この学習では引用カードを用いる。引用カードには3色用意してあり、赤が反対意見の引用、青が意見の補強のための引用、黄色がその他の目的（言葉の定義のための引用、一般化のための利用、現在言われていることの確認のための引用、理由を考えるための引用など）となっている。引用カードをもちながら資料を読むことで、引用するために本を読むこと、また何のために引用するのかという意識を強くもちながら資料を読むことができ

と考える。引用のために読むとは、自分の考えとの関連を考えながら、本を選び、目次や索引などから自分に関連のあるページを探し、読むべき場所を見付けたらていねいに読み、引用する文章を見つけるという読み方である。引用カードを手元において読むということは子どもに目的に応じた読みを行わせる物理的な学習環境として、効果があるのではないかと考えた。

3. 授業の実際

(1) 単元名・活動名

引用を使って研究博士になろう ――宇荘テーマ活動をしよう―

(2) ねらい

国語への関心・意欲・態度	書く能力	読む能力	言語についての知識・理解・技能
資料を用いて研究することの良さを知り、今後も続けようとする。	ポスターづくりや発表に、引用や、図表、グラフを用いて、自分の考えが伝わるように書く。エ	目的に応じて資料を選んで、目的に即して読み、自分の考えを広げたり、深めたりする。オ	用紙全体との関係に注意し、文字の大きさや配列を決めたり、筆記用具を目的に応じて選んで書いたりする。(2)ア、イ

(3) 授業の分析・考察

抽出児Iの学びの姿を描き、授業の分析を行う。

①研究仮説 きのこは蒸散するのではないか

②実験方法

一字荘周辺の空気、キノコ（種類は不明だが、ナメコに似ている。）、湿らせた布をビニール袋に入れ、約30分置き、中の曇り具合を調べる。

③結果

一字荘周辺の空気 変化なし
きのこ 少し水滴がついた
湿らせた布 少し水滴がついた

④引用カード（黄）2枚

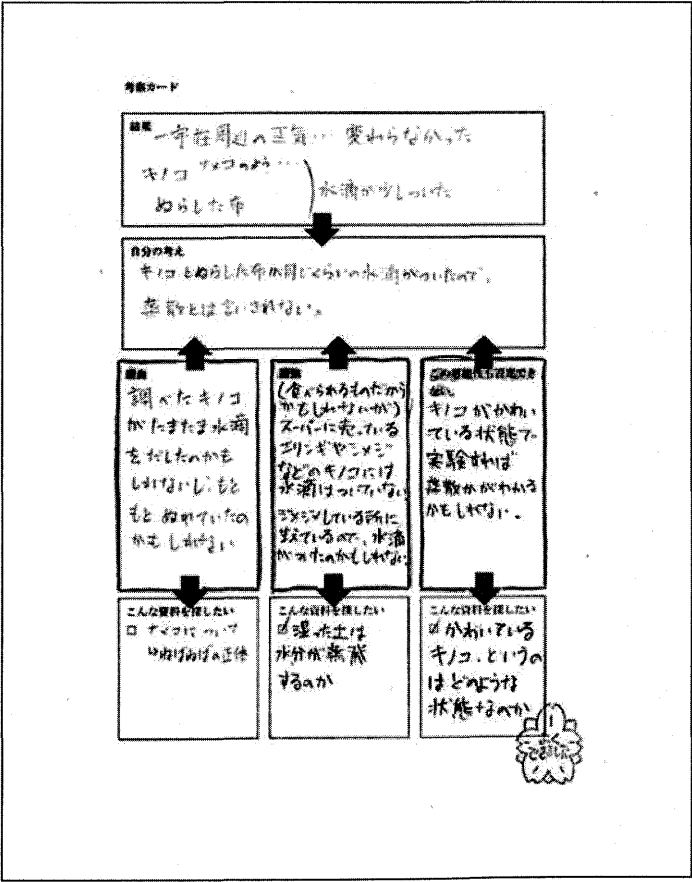
キノコと植物の共生 ひだについて

引用カード（青）2枚 「キクラゲ、シバフタケなどいったん乾燥しても、湿り気を与えると傘が開き、再び胞子を飛ばす種類もある。」「きのこの栽培には豊富な水が必要不可欠だ。」

引用カード（赤）「キノコは植物ではないので、光合成をしない。」

⑤考察するために引用資料を探す。

Iは実験から3つの比較を行い、スポンジときこので水滴の量がほとんどかわらなかったの、きのこが蒸散したとは言いきれないと考え、考察カードを書いている。仮説がはっきりして、しかも実験結果に忠実に従っているため、このような結果が出たと考えられる。また引用カードも3種類挙げ、自分の仮説にそった引用のた



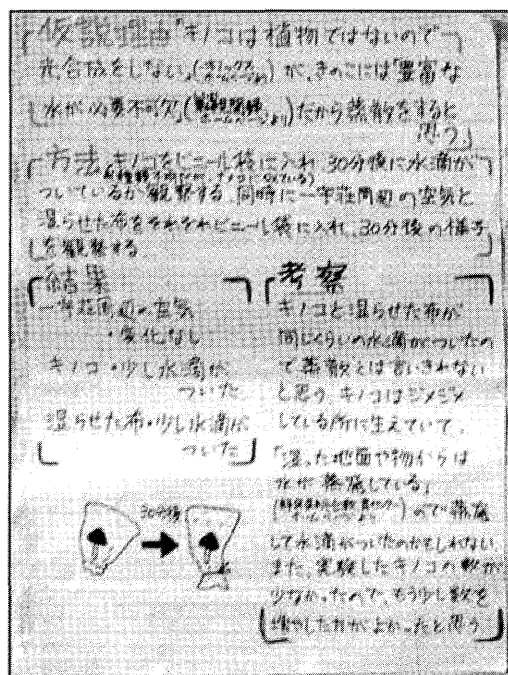
めの資料を探している。またIはスーパーで売っているキノコに水滴がついていないことと、この実験を結びつけ、考察を深めている。

⑥ポスターを書く。

Iはスーパーで売っているキノコに水滴がついていない理由についての引用資料を見つけることはできなかったが、「湿った地面や物からは水が蒸発している。」と静岡県総合教育センターのホームページを引用し、自分の結論を言い切るのではなく、研究結果から多面的に考察できている。

⑦ふりかえりをする。

Iは振り返りを以下のように書いている。



考察に引用を使って、補強に役立ちました。しかし、発表にインターネットの引用しか出来なかったのも、そこが反省点です。また、私は、検索したときに見たい内容がなかなか見つかりませんでした。そこで、キーワードを変えてみたら、よいホームページが見つかりました。キーワードを工夫して、調べることを気をつけなければいけないと思いました。キーワードの工夫をアドバイスしてくれたのは私のバディでした。私のバディは「関連するワードも一緒に調べるといいと思います。」と書いてくれ、検索するときに役立てることができました。

研究バディからアドバイスをもらい、それを活かして、自分の研究の考察を深めることが出来たし、研究方法について振り返ることで、今度引用するときの資料の探し方についても学ぶことが出来たと言えよう。

4. まとめ

以上、抽出児Iの学びの履歴から、この学習を明らかにしてきたが、以下のようなことが考えられる。

(1) 学習環境としての活動

当然なことだが、教師は押し付けた活動ではなく、児童の主体的な活動なので、児童は積極的に活動していた。教師が活動を押し付けるのではなく、児童の主体的な活動になるよう、単元を貫く言語活動、0次の学習、実の場における活用を導入することで、児童は積極的になる。積極的になると、児童は本気で対象と向き合うようになり、資料を探したり、考察を深めたりするエネルギーになった。

(2) 学習環境としての共同体

Iのふりかえりにもあるように、研究バディは効果的に作用した。授業者が教えるのではなく、学び合いにすることにより、きめ細かい、そして即応的な学びの援助が出来た。そして何より自分たちで解決するんだ、という学習の主体性を育てることが出来た。研究バディは相手とのバランスが難しい場合もあるが、考察を深める学習環境として効果があったと言えよう。

(3) 課題

インターネットで検索することはとても効果的であるが、指導が困難な点も多い。探したい資料の方向性が明らかになっても、それを見つけるためにどのようなキーワードを当てはめたらよいのか、は大人でも困難な課題である。当然検索方法に対する理解は必要であるし、対象についての知識も必要になってくる。インターネットを使ってどう資料を探すのか。それを今後の課題としていきたい。